

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520203

研究課題名(和文) 日本近世文学の文化基盤としての茶の湯文化に関する包括的研究

研究課題名(英文) A study of the impact of the tea ceremony was given to the literature of the Edo Period

研究代表者

石塚 修 (ISHIZUKA, Osamu)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：10282287

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、従来、曖昧なままに検証されてきた文学作品と茶の湯の関係性について、江戸時代の作品を中心にして、よりその実態が明確になるように、文学作品と茶の湯の双方向から検証した。研究の成果としては、日本文学、とくに江戸時代の作品において緊密な関係があることを検証し証明した。具体的には井原西鶴の作品群やそれにつづく浮世草子、さらには江戸時代に大量に制作された随筆作品における茶の湯との関連性を精査したものである。

研究成果の概要(英文)："Tea ceremony" is one of the traditional culture of Japan's leading. It is among the representation of Japanese literature, that how understanding that either has been accepted as a representation has deepened is the greatest achievement of this research. Japanese literature, it verifies that the particular with the works and tea ceremony of the Edo era close relationship, it proved.

研究分野：日本文学

キーワード：日本文学 江戸時代 茶の湯

1. 研究開始当初の背景

日本近世文学と周辺の文化領域についての関心が近年高まりつつあり、たとえば2009年7月には楠元六男編『江戸文学からの架橋 茶・書・美術・仏教』(竹林舎)が刊行されるなど、文学を周辺の文化領域から逆照射し、新たな日本近世文学研究の糸口としようとする方向性が強まってきた。研究代表者は先の著作にも井原西鶴の遺稿集『西鶴名残の友』の最終章「入れ歯は花の昔」と茶の湯文化に関わる論考を執筆したが、これまで井原西鶴の作品中での茶の湯文化の影響関係について考察を続けてきた。井原西鶴の作品群が茶の湯関連の話で閉じていることももちろんであるが、当時の文学と茶の湯文化とは深い関係があることはもはや疑いのない事実である。しかしながら、その一方で、日本近世文学と茶の湯文化との影響関係についての実態調査はなかなか本格的になされる段階になっていなかった。研究代表者としては井原西鶴という元禄期を代表する文学者研究から茶の湯文化の町人階層への定着と拡大を、さらに時代を追って調査・検証したいと考えた。

日本近世文学に関してはさまざまな作家・ジャンルごとの全集が整備されているものの、茶の湯文化に関しては、井口海仙・千宗室他『茶道全集』創元社 全15冊(1925)・千宗室『茶道古典全集』淡交社 全12巻(1977)・橋本博『茶道古典大鑑』大学堂(1933・

1973再版)があるにとどまり、その他の膨大な資料はいまだ内容的な調査まで進められていないのが実情であった。茶書の刊行については筒井紘一『茶書の研究』淡交社(2003)による整理があるものの、各茶書がどれほど日本近世文学と関わる記事を掲載しているかについてはまだ未調査のものが多かった。

茶の湯文化の実態が現在ののような画像資料で見ることができない以上、茶書を通してその実態の把握に努める意外に方法はないのである。そして茶の湯文化特有の各流儀の存在により、横断的な茶書の把握が困難である学術環境を克服して、江戸中期の茶の湯文化の実態の解明をおこなうことは、日本近世文学の研究のみならず茶の湯文化史の研究の進展の側面からも重要な研究になると考えた。

2. 研究の目的

本研究は日本近世文学、とくに元禄期以降の文学作品と茶の湯文化との影響関係を精査し、それを解明することによって、日本近世文学の表現特長の一側面を検証することに資することを目的とした。研究は大きく分けて2段階となっており、第1段階では元禄期以降、文化・文政期にいたる間の文学にみられる茶道関連の記事の精査とそのデータ整理をおこなう。第2段階としては、それらの記事が茶の湯文化とどのように関連しているかを検証する。これにより、従来、未整理

であった日本近世文学と茶の湯文化との影響関係について解明が進み、日本近世文学のみならず茶の湯文化研究のうえからも有意義な研究となると考える。

3. 研究の方法

平成 24 年度

前半期 日本近世文学中期作品群に見られる茶の湯関連記事の精査

後半期 日本近世文学中期作品群に見られる茶の湯関連記事の整理

平成 25 年度

前半期 日本近世中期の茶書群の精査と整理

後半期 日本近世中期の茶の湯文化の実態の解明

平成 26 年度

前半期 日本近世文学中期作品群の表現と茶書による茶の湯文化の実態との比較・検証

後半期 茶の湯文化との影響関係からみた日本近世文学の表現の特性の解明

4. 研究成果

研究成果としては、5. に列挙したとおりであり、従来、曖昧なままに検証されてきた文学と茶の湯の関係性が、今回の精査によって、各作品において、より具体化して検証できたことは、文学研究のうえからも大きな成果であったと考える。

井原西鶴(1642 ~ 1693)は、

浮世草子作家の嚆矢として、わが国の江戸時代前期、とくに元禄時代を代表する作家の一人である。西鶴が活躍した元禄時代は町人たちが経済的に裕福になり、和歌・能楽・香道・茶の湯などさまざまな文化的活動が発展し展開されていった時代でもあった。そうした文化的活動の活発化は、当然のことながら西鶴の文芸作品にも深く影響を与えていたはずであり、西鶴の作品にもそうした文化活動が受容されていたからこそ、広く読者を得られたのであろう。5. に挙げた論文は、その文化活動のなかから、とくに茶の湯文化を取りあげ、それが西鶴の文芸作品とどのような影響関係を持ったかについて考究したものである。

西鶴が浮世草子作家となる以前に活躍していた俳諧の世界と、茶の湯文化との関わりを探究することで、その解明を試みた。

西鶴は15才前後から俳諧を学びはじめたとされ、やがて二一歳になった寛文二(1662)年には点を付けるまでの実力を持つようになり、寛文一三(1673)年、三二歳の時に『生玉万句』興行を催して大坂における俳諧師としての地位を確立したと考えられている。鶴永から西鶴に改名したのもこの年のことである。『好色一代男』の刊行が天和二(1682)年、西鶴が四一歳の時であるから、彼が浮世草子作家として活躍する以前のおよそ10年間は俳諧師として活躍していたことになる。

西鶴の浮世草子にみられる茶の湯文化の影響を考える前提として、当時行われた俳諧書や西鶴の俳諧作品から茶の湯と関わる事項を抽出し検証することで、俳諧師西鶴が持っていたであろう茶の湯知の範囲を想定してみた。西鶴の浮世草子作品に俳諧師として培った茶の湯の知識がどのように活かされていくかを考察するには、この領域の想定はきわめて重要であると考えたからである。

西鶴の俳諧師としての基礎知識を形成する源泉となっていたとされる『毛吹草』や『類船集』にみられる茶の湯に関する項目を精査し、『西鶴大矢数』にそうした知識がどのように反映されたかを考察することで、西鶴の茶の湯の知識の基層を確認した。そして、その結果、西鶴にかぎらず、俳諧師として認知されるには茶の湯に関する相当な知識が要求されていたことが判明した。

さきに検証した俳諧師の茶の湯に関する知識が、たんなる形式的な知識にとどまらず、俳諧師から浮世草子作家に転じた西鶴が文芸を創作するうえでの感性にたいして、多少なりとも影響をもたらしている可能性を、俳諧用語の一つでもあり、茶の湯関連語としても重要な一語ともなっている「しほらし」に注目して考察した。その結果、俳諧の付け句の批評語として西鶴が用いた「しほらし」は、茶の湯文化と深く関わって用いられていることが判明した。また、西鶴の「しほらし」

の用法を、俳諧と浮世草子の用例を通して検討した結果、俳諧研究でしばしば「しほらし」を「しをらし」・「しをり」と表記し、混用していることに問題があることが指摘できた。

41歳で『好色一代男』を刊行して以降、俳諧師から浮世草子作家として文芸活動の中心を移して活躍していく西鶴が、茶の湯知を駆使して作品の表現構造を構築していったことで多くの読者を獲得した可能性を、各作品を通して考究した。

西鶴の浮世草子としての処女作品であり、好色物の代表作である『好色一代男』巻五の一「後には様つけて呼」および巻七の一「其面影は雪むかし」の二章を中心に、茶の湯との関係性の深さについて論じた。これらの章の中心人物である遊女吉野や高橋の描写において、西鶴の持っていたと想定される茶の湯知がそれぞれ深く影響を与え、とくに遊里という華やかな世界で、あえて質素素朴を重んずる「わび茶」のしつらえを演出したことが、それぞれの章の描写のなかで効果的に活かされていることを検証した。

『西鶴諸国ばなし』巻五の一「挑灯に朝顔」の章をとりあげた。この章そのものが「茶の湯」にまつわる話であり、そこにおいて西鶴の茶の湯知がどこまで活かされて作品が書かれ、当時の茶の湯の実態を反映させて作品が構成されたかについて、元禄期に盛んに板行されるようになった茶の湯伝書を精査することで考察した。その結

果、この章の話は、当時の茶の湯伝書に書かれ、一般的に知られていた茶の湯の作法のあり方を、意図的に不作法に転換することで、読者に対して当時の茶の湯のあり方について再考させるような構成になっていることが判明した。

武家物の代表作である『武家義理物語』の巻三の二「約束は雪の朝食」をとりあげ、そこに描かれた石川丈山の小栗への対応のあり方が、章題には「朝飯」と標榜されつつも、実は当時の茶の湯の作法にかなった対応であり、この章が茶の湯と深く関わる話としても読者に受容された可能性が高いことを検証した。

町人物を代表する『日本永代蔵』をとりあげた。第四章では巻四の四「茶の十徳も一度に皆」で、この章の主人公利助が非業の死を遂げる描写のあり方などが、章題にもなっている「茶の十徳」を強く意識して構成されていることを、「茶の十徳」の歴史的な変遷を追求しつつ解明した。

『日本永代蔵』巻三の三「世はぬき取の観音の眼」および巻四の二「心を置込古筆屏風」の二つの章を、茶の湯と深い関わりのある「目利き」という用語に注目して読み解いた。その結果、巻三の三には元禄時代における町人階層での茶の湯の盛行による茶道具の不足が強く影響していることが判明し、巻四の二「心を置込古筆屏風」は、当時の長崎の貿易状況と、茶の湯の道具として当時新たに注目を集め

始め市場価値を持ってきた「古筆」を取り巻く状況とが深く関わって成立している章であることが明らかになった。

西鶴の遺稿集の一つであり西鶴という名の冠せられた最後の作品ともなる『西鶴名残の友』の最終章、巻五の六「入れ歯は花の昔」をとりあげ、西鶴の作品に反映してきた西鶴の茶の湯観が、利休流の「わび茶」の持つ感性に収束し、それがこの章において結実している可能性を検証することで、西鶴の晩年に「わび」志向が見られることを考察した。『万の文反古』巻一の四「来る十九日の栄耀献立」にも西鶴の茶の湯に関する知識が生かされており、そのうえで文学の中だけで再現が可能な献立をえがいたことを解明した。

以上のように、西鶴の浮世草子の作品を、好色物・武家物・町人物、さらには遺稿集と、作品全般を見通す形で茶の湯文化との影響関係を検証した結果、浮世草子作家としての西鶴には、茶の湯からの影響が少なからずあったことが作品の描写や構成を通して検証できたと考える。

西鶴の初期作品から遺稿集までを茶の湯の影響関係を検証するなかで西鶴の求めた茶の湯観が、芭蕉の求めた「わび」に通じる可能性を導くに至ったことを最終章でまとめた。これは西鶴の作家としての単純な進化論に立つものではなく、西鶴の人生とも深く関係づけて考えられるべき問題で

あると考えた。西鶴作品と茶の湯の関わりを検証すると、彼は晩年に至り「わび茶」へ志向する。それは西鶴が芭蕉の「わび」と類似した文芸観を晩年において少なからず抱いていた可能性を示唆するものである。

西鶴が影響を受けた茶の湯文化は、千利休に代表される「わび茶」によるところが大きく、その美意識が作品に強く影響をもたらした可能性が高い。このことは、西鶴作品の人間観照の鋭さと深く関わっていると考えられる。道具中心の茶の湯から、人間中心の茶の湯へと転換していった結果生まれた「わび茶」を西鶴が志向していったことは、とりもなおさず、西鶴の文芸創作の関心が人間に向けられていたことと一致するからである。西鶴における茶の湯の受容は、そうした必然からもたらされた結果でもあった。

西鶴の作品にみられるこうした傾向は、その後の作家にも継続していき、たとえば永井堂亀友『風流茶人氣質』（明和七・一七七〇年刊）といった茶人そのものを文学の素材として扱う作品の登場は、まさに文学と茶の湯の関係性のおおきな精華である。また、茶人川上不白（1716～1807）の場合などは、茶人として俳諧と茶の湯の関係を茶道具などの取り合わせを通して深めたことが、その茶会記を分析することで判明した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研

究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

石塚修『『万の文反古』巻一の四「来る十九日の栄耀献立」再考 - 献立のどこが栄耀なのか - 』『近世文藝』100 日本近世文学会 pp.45-58 2014-8・査読有

〔学会発表〕（計 2 件）

石塚修「茶の湯と俳諧 - 川上不白の茶の湯と俳諧」2014年中國文化大学日本語文学系国際學術研討会 台北(台湾)2014-5-10

石塚修「俳茶会「夕顔の」考 - 文芸と食文化のコンチェルト - 」2013年中國文化大學日本語文學系跨域性日語教育學國際學術檢討會 台北(台湾) 2013-5-18

〔図書〕（計 2 件）

石塚修『西鶴の文芸と茶の湯』思文閣出版 pp.1-299 2014-2

石塚修「茶と文学」『講座 日本茶の湯全史 第三巻 近代』思文閣出版 pp.173-196 2013-7

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石塚 修 (ISHIZUKA, Osamu)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：10282287